

## 明治大学平和教育登戸研究所

—資料で考える戦争と平和—

明治大学文学部講師

渡辺 賢二

### 1. 明治大学平和教育登戸研究所の開館

2010年4月、明治大学生田キャンパス内に明治大学平和教育登戸研究所資料館がオープンした。旧陸軍登戸研究所（以下、登戸研究所と略す）の生物兵器研究のために建てられた鉄筋棟を改装した資料館である。戦争遺跡をそのまま活用し、そこで何が行われていたのかを伝える資料館は類例のないものである。この資料館がオープンできたのは明治大学の英断による。大学が、この場を「歴史教育・平和教育・科学教育の発信地にする」とともに、地域社会との連携の場にしていく」としていることも素晴らしいことである。

しかし、こうした成果を生む背景には二十余年の長きにわたって多くの人たちが努力してきたことがあった。とりわけ、ここ登戸研究所に勤務していた人たちが重い口を開き、資料を提供してくださり、また資料館建設を大学に要望されたことが決定的であった。

小田急線生田駅で下車し、10分ばかり歩くと明治大学生田キャンパスに着く。入り口から急坂を登り切った右手にこんもりとした森があり、当時弥心神社と呼ばれた神社がある。そしてその境内に「登戸研究所跡碑」と記された碑がある。この碑の建立過程が資料館の原点である。

実は、戦後37年を過ぎた1982（昭和57）年になって登戸研究所に勤務し「青春」を過ごしていた人々が再会し登研会を結成し、碑の建立の立案したのである。そして6年後に会員のカンパで明治大学の許可を得て、現在の場所に碑は建立された。

碑文の案も当初は3案だされ、会員の投票で正面には「登戸研究所跡碑」そして裏面には「すぎし日はこの丘に立ちめぐり逢う」という「想い」をこめた句が刻まれた。

私は当初、この句に違和感を感じていた。しかし、登戸研究所に勤務していた方々に接するに従ってしだいに分かるようになっていった。この句はまず



登戸研究所跡碑

「すぎし日は」できって、当時を思い起こしてはじめて理解できるのである。この丘で行った出来事の重さや戦争中にもかかわらず恵まれた環境、戦後も家族にも話せなかった孤独感などがすべて凝縮されている。そしてそれから解放される日が近づいたことを示していたのである。登戸研究所で働いていた科学者・技術者が戦中・戦後をどのように過ごしてきたかを考えたいものである。



動物慰霊碑

### 2. 動物慰霊碑が語りかけるもの

現在の明治大学生田校舎の正面入り口の裏手の目立たないところに「動物慰霊碑」がある。3メートルくらいある立派なものである。この碑は私にとって登戸研究所の調査に入る原点でもある。いまから25年前に川崎中原平和教育学級の企画委員（市民・高校生・市職員）が地域の戦争を知ろうと調査活動を開始した。あるジャーナリストから生田で戦時中、稲が実らなかったことがあると聞いた私たちは見学会を計画した。新聞報道があったためかこの動物慰霊碑を見ていたとき一人の老人（井上さん）が現れたのである。そして自分はここの第四科で働いていたことを証言された。ところが不思議なことに当時この大きな碑は知らなかったという。「科が違えばそんなものだった」とこともなげにいう。しかし、井上さんは「最近では登研会ができ、他の科の人とも交流している」ことも話され、川崎市域に健在である人の紹介もしてくれたのである。私たちは、早速、川崎市教育委員会の承認のもとで99名の当時川崎に在住の登戸研究所勤務員にアンケートをお願いし

たのである。22名から貴重なご返事をいただいたが、その中の第二科（生物・化学兵器担当）にタイピストとして勤務されていた小林コト（旧姓、関）さんから貴重な『雑書綴』という資料が提供されたのである。このなかから青酸ニトリルや蛇の毒などいろいろな毒物兵器を開発していたことが分かった。そして1943（昭和18）年4月、伴繁雄さんが陸軍技術有功章を授与されている事実を知った。そしてそのときの副賞一万円（現在額では約一千万円）でこの碑と弥心神社を建立したことを知る。

さらに、調査をすると、伴さんは登戸研究所で研究・開発した毒物を使い石井四郎が管轄する中国の南京の病院で人体実験をしていたことも分かった。帝銀事件の際、警視庁の捜査に協力した証言の中で「最初は嫌だったがだんだん趣味になった（薬の効き目が分かるので）」と言っているのである。通常の倫理観を失っていく科学者の様子が分かる。巨大な動物慰霊碑はこうしてみると登戸研究所を象徴するモニュメントである。

### 3. 2011年解体の木造建物で行われていたこと

明治大学生田キャンパスは、その全体が戦争遺跡となっている。正門をまっすぐ進むと、左手に大きなヒマラヤ杉がそびえ立っている。実はこの杉は、登戸研究所の本館前に植樹されたものだ。ヒマラヤ杉は登戸研究所の全貌を知っているといえよう。本館跡を左に曲がると広い道がある。当時のメインストリートである。その途中に陸軍のマークが付いた当時の消火栓がある。さらにまっすぐ進むと右手に大きな木造の建物の跡がある。私たちがそこで行われていたことを知るまでにはさらに時間を要した。その理由は登戸研究所自体が秘密戦（防諜・諜報・謀略・宣伝）という隠された研究所であったが、ここ第三科はさらに「秘密の中の秘密」の場所で周りは3メートルくらいの板塀で張り巡らされ、第三科



第三科（2011年2月解体）

の人以外には所長くらいしか入れなかった場所だったからである。ここに勤務していた人たちは戦後30年過ぎて登研会を結成したが、第三科の人たちは当初、別の組織を作っていた。それだけ重い過去を背負っていたのであろう。彼らがここで行っていたのは中国の法幣（正式な紙幣）の偽造であった。この作戦は、参謀本部が本腰を入れたもので、米英の支援をうけて1935年に確立したばかりの国民政府の法幣制度を偽造紙幣によって混乱させ、あわせて軍需物資を購入しようというものであった。1939年くらいから本格的に製造したが、アジア太平洋戦争にはいると香港を占領し、そこから法幣の原版を手に入れた。だからそれ以降はその作業に従事した大島康弘さんにいわせれば「本物も偽物もない」状態となったのである。その印刷工場だった場所が現木造建物であった。

1942年当時、国民政府の最高額の五圓、十圓札を偽造し使用したこの作戦は一時的には大きな「成果」をあげた。しかし、米英は直接空輸で千圓、一万圓という額の法幣を国民政府に供給したため、偽札の影響力は次第になくなったのである。敗戦後この「謀略の丘」は証拠隠滅命令によって偽造紙幣焼却の煙が長期間途絶えることがなかったという。

### 4. 登戸研究所資料館の価値

今はきれいに塗装され窓枠なども変えられているので一見、新しい建物と錯覚してしまう。しかし、この建物こそ風船爆弾に搭載する予定の牛疫ウイルスや中国大陆で大量に散布した植物を枯らす細菌兵器を開発した鉄筋棟であった。中にはいると外見と違い天井は高く広い空間を使った機密性のある建物であることが分かる。当時の流し跡や暗室などの保存もよくされている。

展示内容は、山田朗文学部教授（資料館館長）の指導のもと大学院生が総力を挙げて作成しただけに



資料館外観

大変充実したものとなっている。第一展示室は、登戸研究所の全体像が概観できる。1937年に陸軍科学研究所の電波兵

器の実験場として最初は出発したという。登戸研究所が標高30メートルくらい上ったところになぜ設置されたのかが分かる。そして39年以降は次第に秘密戦研究所として姿を変えていく様子が説明されている。登戸研究所は中野学校（特務機関員養成）と連動し、他の陸軍技術研究所と性格を異にしていたことも大切なことである。秘密戦の研究所であったため予算は多く、優秀な科学者や技術者が多数採用された。そして物理的な兵器を担当する第一科、生物化学兵器を担当する第二科、偽造紙幣を担当する第三科、さらに兵器の製造をする第四科からなる総員一千名の陣容で構成されていた。軍・産・官・学の壮大なプロジェクトもつくられ、秘密戦のためのあらゆる兵器が開発・製造されていた。しかし、第一次資料は戦前も戦後も遺されていないところにも大きな特徴があった。そうした内容が展示されている。

第二展示室では風船爆弾や電波兵器など主に第一科といわれた物理的な兵器の開発状況が解明さ

れている。とりわけ風船爆弾が当初、細菌兵器を搭載して発射する計画が存在していたことが証明されている。実際には搭載しなかったが細菌兵器を開発していたこと自体が謀略兵器としての脅威を高めたことは想像できる。

女子中学生の柔らかい手で和紙をコンニャクで貼り合わせた気球を8000キロメートル離れたアメリカまで飛ばすのはたやすいことではなかった。高度維持装置を開発し、アメリカ以外のところに飛ばないようにするため、福島県勿来、茨城県大津、千葉県一宮の発射基地から約9300発打ち上げられた。これは、本土決戦準備の段階での謀略作戦であった。この展示室では、身近な和紙やコンニャクが兵器になる異常性も考えることが出来る。

第三展示室は第二科の内容が紹介されている。とりわけ『雑書綴』から見えてくるものが細かく分析されている。秘密戦とは「防諜・諜報・謀略・軍事宣伝」からなり、特務機関や外地憲兵隊が必要とするあらゆる資材がここでは開発されていた（秘密インキな

汪兆銘政権と偽札作戦関連年表

1938年…3月日本円低落傾向へ。3月山本憲蔵が参謀本部第二部第七課（支那課）へ。10月参謀本部第二部第八課設置（謀略課）。課長・影佐禎昭大佐、課員・唐川安夫中佐、岩畔豪雄中佐、臼井茂樹中佐。12月岡田芳政が参謀本部第二部第八課にはいり、経済謀略担当。

1939年…8月山本憲蔵が登戸研究所第三科科長に。偽造紙幣工作体制つくられる。5月汪兆銘がハノイから上海へ。6月汪兆銘日本へ。再び上海で新政府準備。これを支援するため「梅機関」を設置（影佐機関）。10月支那派遣軍（総軍）編成。岡田は参謀として南京へ。

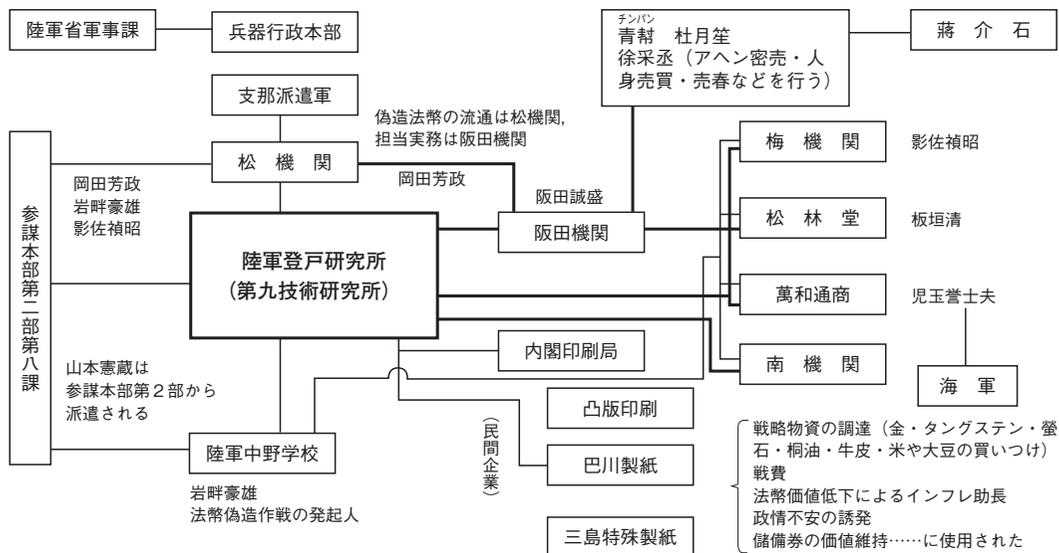
1940年…1月28日上海に「松機関」設置（阪田誠盛を責任者に）。3月30日汪兆銘政権誕生。5月頃中央準備銀行設立。

1941年…5月22日清郷委員会設置。7月から工作開始。12月8日第二八軍香港占領。

1942年…4月登戸研究所勤務員香港から印刷板と輪転機持ち帰る。実際の原版を使つての偽造紙幣工作開始。

1943年…11月からの調査で清郷工作の失敗を把握。11月大東亜会議（汪兆銘参加）。

表1 登戸研究所第3科に見る「杉工作」（贋幣作戦）関係図（略図）

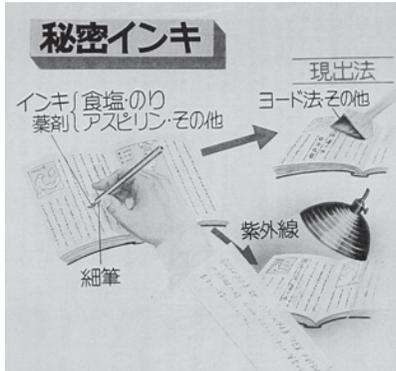


— は偽造法幣の流れ

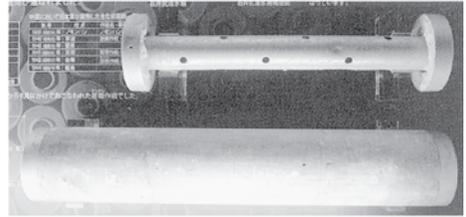
注) 「陸軍贋幣作戦」などより作成



風船爆弾10分の1模型



秘密インキ解説



石井氏濾水機濾過筒

ど)。そしてここで開発された生物化学兵器が実際に日中戦争で用いられ、アメリカとの戦争でも細菌兵器の開発が進められていた事実を学ぶことができる。

第四展示室は第三科の偽札作戦の顛末が紹介されている。この作戦は本格的な経済戦として準備されたもので軍事物資を偽札で購入し、兵士の給与の一部もこれで支給し、インフレを生み出して蒋介石政権を動揺させ、あわせて汪兆銘政権という親日政権をつくらうという謀略作戦であった。さらに、アジア太平洋戦争にはいつてからは1942年に香港を襲い、中国の正式な紙幣の印刷版などを登戸研究所に接収して印刷するなど本格的な偽造紙幣作戦を展開した。これに対してアメリカやイギリスは千圓、一万圓など額を高額にしながら本国から空輸して蒋介石政権を支援するなど紙幣を使った経済戦が展開され、こうした結果、日本軍の経済戦も失敗に終わることになったのである（表1）。

そして第五展示室では本土決戦体制時の登戸研究所の役割、戦後の登戸研究所勤務員がたどった様子、さらにその関係者が資料館建設を要望するいきさつなどが展示されている。

全体として科学が戦争に動員されていくときの怖さ、戦争の裏面史としての秘密戦から見えてくる戦争の実相などを史実を通して学ぶことができる価値は大きい。

## 5. 若い世代への力強いメッセージ

第五展示室の後半で、登戸研究所勤務員がどのようにして若い世代に語り始めたかが詳しく説明されている。その実際の様子を知っている者の一人として当時を再現してみたい。私たちが市民とともに登戸研究所を調査し始めた頃（1987年）、ちょうど研究会で関係者はまとまり始めていた。そして少しづ

つ聞き取りも可能になってきた。しかし、肝心な内容になると口をつぐむことも多かったのである。そうした聞き取り作業に次第に高校生が参加するようになっていく。その動機

は「核兵器は調べたので、次は生物・化学兵器を調べてみたい」という程度のものであった。しかし、登戸研究所に勤務した人の口は重かった。後で分かったことだが、川崎市で調べていた高校生とは別に疎開先の長野県駒ヶ根市でも登戸研究所に勤務していた人の聞き取りをして同じ問題にぶつかっていた。そしてほぼ同じ時期に「大人には話さないが君たち高校生には話そう」と関係者が重い口を開いたのである。高校生たちの努力によって隠されていた実相が次第に浮き彫りにされていった。その一つは石井式濾過器の濾過筒についてである。伴さんは長野県の自宅に大量にあった濾過筒を提供してくれた。それが細菌戦部隊を管轄する防疫給水本部が自分たちの生き残るための秘密兵器として管理していたものであることがわかった。それが本土決戦体制の末期に長野県に大量に供給されていたのである。

ところが高校生たちの発想はそれを理解しただけにとどまらなかった。濾過筒には「軍事秘密」とかかれていたが「それは戦争中の話で今でも役立つ技術ではないか」と彼らは考えた。そして横浜の工場を探し出すとすぐに訪問した。会社からは「調査に君たち高校生がきたのは進駐軍以来」といわれ、同時に今でも学校のプールなどの濾過に使われていることを知る。こうして高校生たちは「戦争と平和はそんな遠い関係ではない」、「自分たちが科学や技術を平和に活かすかそれとも戦争に使うかはいつでもしっかり考えなくては」という結論に達したのである。若い世代が「登戸研究所遺跡で学び」、「戦争と向き合い」、「歴史と対話し」、「科学や技術を真に平和な社会に貢献できる」力を育てることを期待したい。

（写真提供 明治大学平和教育登戸研究所資料館）